



岩手食文化研究会便り

発行日 二〇一二年 九月 一日

編集者 宮本 義孝 第二一号

葛巻町
江刈川

そばの花見会

平成二十四年八月二六日(日)葛巻町江刈川で、森のそば屋主催「そばの花見会」があった。今年も、岩手食文化研究会の会員でもある高家卓範、童子、夫婦が江刈川高家領に蕎麦屋を開店して二十年になる。我々も会を盛り上げようと、十三人が参加した。

- 日程は、会場である赤い屋根の分枝で受付をすませた後、十分間ほど、簡単な日程説明と連絡。そして、
- 午後一時半から一時間、蕎麦畑で「そばの花見会」
- 二時半から四時までは、会場で歓談と余興。
- 四時以降は、森のそば屋に席を移して、蕎麦振舞い、だった。

普段、現地研修で出掛ける時は、いつも誰かの車に便乗さ

せてもらうのだが、今回は盛岡駅発十時十五分、久慈行きものJRバスを利用した。

便乗は、話が弾んで楽しいが、バスも窓外の景色を眺めたり、釣りすればそのままとうとしたり、なかなか良い。

我家近くのバス停、栗子から江刈川までは丁度、一時間半の行程である。

来たバスは五、六十人も乗れる大型のものだったが、乗客は十人にも満たず、妻も私もそれぞれ座席を独り占めにして向かった。

バスが沿道内を過ぎて国道二八一号に入ると、窓外の景観は改まる。これまでは街から街を通り抜けていたものが、空と山と緑だけになる。

間もなくバスはゆっくり左に右にと、山を回り込みながら次第に高さを上げていく。空が窓いっぱいになり、周囲の山々が、目線の下になる。大坊峠である。

峠は上りきると、今度は下るのだが、その感覚があまりしない。高いままで道がつづいていくよ。峠折、小さな集落が現れ、後方に去っていく。

そんなことを繰り返している内、古い街並みに入った。葛巻だった。昔は、久慈や野田を盛岡に結ぶ街道の要所だった。

塩や鉄、海産物を積んだ牛や人が夕く行き来していた。今は陽炎の立つ中、どこか、けたるげにくすんでいた。

江刈川は、そこから更に行って平庭高原の少し手前がある。バスを降りると、道路を下って、川底の大きな石が所々露出している流れがある。江刈川だ。流れを引いて水車小屋があった。水車は重い音をたてて回っていた。その手前に民家風の建物がある。そこが、森のそば屋だ。川を挟んで右手には、赤い屋根の木造校舎がある。廃校になって久しいが、地域の人に守られ、今はこの集落のコミュニティセンターのような役割をはたしている。そばの花見会も、ここが会場に使われている。

蕎麦の畑は、道路を渡って、反対側の山の斜面にあった。高家さんのご主人が案内してくれた。

夕顔が二つ三つ、重たげにぶら下がっている棚と、馬鈴薯の花がつつましげに咲いている。手入れの行き届いた畑の間を抜けると蕎麦畑だった。山の斜面を棚にして、一面、白い花が咲いていた。七月二六日に種を播いた、という。

時折、雲間から陽が差すと、花はキラキラと、光の雫がこぼれるように輝いた。上にあがって畑を身降りすと、一層、白さは際立ち、風が吹くと面がやさしく揺れ、妖精たちが笑

声をたてながら飛び交っているようだった。

目を上げて更に遠くを見やると、広がる空の下で、一、二、三、九メートルの安家森は、平庭岳、遠別岳など一〇〇〇メートル前後の山々と屏風を立てたように連なっている。

その下には、道路に沿って民家が寄りそうように小さく集落をつくっていた。まるで大自然に抱かれ、見守られているように見えた。

時が静かに流れていく。街中の喧嘩に馴らされた心にも、安らいだ豊かさが広がっていくようだった。

畑中の道を上りきった所に、ビニールを張った作業場があった。その先の、茂みの手前に、黍が植えられ実をつけていた。見るともなく眺めていたら、

「能避け、だね」と、後ろで声があった。これが本当にそうなのかは知らない。けれど、そこに黍畑があることにより、熊は下の人家に近づかないように思われた。

今、県内では、熊の出没がニュースになっている。つい、二、三日前の新聞にも、熊が家に上り込んで仏壇の供物を食い散らしていたという記事が載っていた。私が住む村でも毎日のように、熊が現れたので、と、役場の、注意を促すアナウンスが流れている。

昔、村には、里山といって、森の獣と人間と、どちらの領分ともつかない空間があった。が、効率を第一に考える今の人は、それが、無駄に思えたのだろう。埋めてしまった。つまり熊が人里に出没するのでなく、人間が獣との距離を取り払ってしまった、ということだ。

この森が熊のために植えたものか、本当のところは判らな
いが、もしそうなら、蕎麦畑を押し広げた人間の、森の獣に
対するお詫でもあるよ。やさしさを感じ、気持が和んだ。
普通に歩けば二十分ぐらいの所を、一時間ほどかけて歩い
た。

受付の時、渡されたものの中に、短冊に切った紙が二枚入
っていた。これは、強制ではないが、蕎麦の花を題に俳句を
詠め、ということだ。また、カメラを持ってきた人は、写し
たものの中から一枚を選んで、後でそれらを貼り出し、皆が
審査員になって、蕎麦振舞いの時に、点の夕かった作品を表
彰するのだ、という。

ただ、そんな余興があるから、気をつけて花を見るように
なる。俳句も写真も流行ハヤリというより、花をよく見まもらいた
いための演出のように思えた。

そう思うと、記念品の写真立てとタオルにも、主催者の配

慮が感じられるような気がした。自分が撮った写真は、これ
で飾ってください。暑い中の花見、ご苦労さんです。汗はこ
れで拭ってください、というのだろう。

今年は、処暑が過ぎても暑さはなかなか衰えない。盛岡で
も連日、三三、四度と猛暑に近い日が続いている。

この日は、江刈川も暑かった。けれど、風が吹けばひんや
りと、木陰に入れば汗がすうつと引いていく。

お喋りしながら歩いてる皆の側で、飛んできた蜻蛉が蕎
麦の花に止まって、目だけ動かし、じつとしていたり、道端
の茂の中には蔓からまませた葛が赤紫の花をつけていたり、
秋はあちこちに姿を見せているようだった。

暑さは結構暑いのだが、街中のようにまとわりつく暑さで
はない。一時間歩いてても、さほど苦にはならなかった。

花見に出たのは五十人ぐらいだった。そこに混って、山歩
きの完全装備で、首から何種類ものカメラを吊した男性と、
小鳥が囀るようにいつも喋りつづけている女性がいた。東京
の某雑誌社から派遣されて来た人らしい。

女性は、羊飼いのシエパードよろしく、畑のあちこちに散
らばっている人たちを器用に集め、男性は首に掛けたカメラ
をいろいろ取り替えて、皆の集合写真を撮った。

花見が終つて分枝に戻ると、炭火を起こした炉の囲りには甘垂れ、大蒜味噌の焼餅や豆腐田楽の串が刺し並べられ、長机の上には、枝豆、玉蜀黍、夕顔の煮つけ、それに、胡瓜、大根、山菜など、様々な漬物が皿に盛り込まれた。飲物もいろいろ用意され、ビールは秋限定のもの、酒は陸前高田の「酔仙」だった。酔仙酒造は昨年の大津波で工場を流失し、ついこの間、工場を七割を縮小して、大船渡に再建したばかりである。復興支援の気持が込められているのだろう。

歓談に先立って、トークとライブがあった。

最初に、先程の、小鳥の囀りのような女性が現れた。フリージャーナリストだという。本人によれば、書いた記事を雑誌社に売る、そんなことを生業にしているのだそう。主に環境に関わる取材をつづけていて、自然エネルギーから、今は、全国の水車小屋を巡っているとのことだった。水車は穀物を搗いて粉にするものだとばかり思っていたが、九州では、杉の葉を搗き、タブの葉を混ぜ、その粉を固めて線香にする、そんな使われ方もあることを、彼女の話で知った。

ライブは、盛岡市の職員で、まちづくりの応援歌を作词、作曲し、自らギターを弾いて唱う。森のそば屋の応援歌もあった。

トークとライブが終ると、七十人ほどの人たちが、それぞれ気心の合った者同士集まって、飲み食いしながらお喋りに華を咲かせた。

時々、それぞれ代表が前に出て、自己紹介を兼ねた挨拶をした。そんな中で、感慨深げに、

「もう二十年になるんですね」と、話し出した人がいた。

「こんな所で、蕎麦屋を始めたってお客が来るわけがないと思いましたが、今でもそう思っているんですが……」

元々、この江刈川と云う所は避地で、何も無い寒村だった。幾世代も、村人は生きるために苛酷な労働をせいられ、働けなくなる、朽ちるように死んでいった。

そんな状況を見ていて、高家さんご夫婦は、村人たちに希望だと喜びたとかを与えられなかった。と考えると、何もない所である。せいせいが蕎麦ぐらいなものだ。

そんなことを来る日も来る日も考えつづけているうち、ハツと気づいた。「蕎麦ぐらいしか」「蕎麦がある」に変わった瞬間だ。そう考えると、自然だっている。自然の中で生きる生活の知恵だっている。素朴で真っ直ぐな人情だっている。これまでは、あることに気づかなかっただけ、ないと思いつていただけである。

十年ほど前だったか、この江刈川に来て、蕎麦打り体験を

したことがある。五人ぐらいで一班をつくり、それに指導してくれる人が一人ついた。皆、お年寄りだったか、楽々と生地を捏ね、麵棒を転がして延ばし、驚くほどの速さと正確さで蕎麦に刻んでいく。動作に無駄がまったくなかった。

「楽しいよ、この歳で仕事ができるって。皆で、八十までは現後でいよう、なんて言いあっているんだ」。ホッ、ホッと笑いながら蕎麦打つおばあさんの顔は明るかった。

「水車は、今時、珍しいから造ったわけではありません。今はどこでも機械で引きます。けれど無理矢理、粉にするのではなく、生きた蕎麦を生きたままに粉にする。それには、水車が必要だったんです」

「天日で干すのは手間がかかります。でも、何故かは判りませんが、電気で乾燥させたのは、味がまったく違うのです」
その時、高家さんの奥さんは、そんな話をしてくれた。

森のそば屋は、打つ時からでなく、蕎麦の種を播くところから蕎麦づくりを始めている。

それにしても、こんな辺鄙な所で、と云う思いは、今でも消えない。けれど、意外、我々が思う以上に、客はここに集まっているのかも知れない。

この日、そばの花見会は、受付が十二時半からだったが、私らが来た時、花見会とは別に、一関市から、四、五十名の人たちが、高家さんの奥さんの話を聴いていた。蕎麦だけでなく、今は、地域振興とか、高家さん、この夫婦の生き方を聴きに、人が集まっているようだ。

そんな、昔のことを思い出したりしているうち、そろそろ、俳句を出す時間になった。

峠越えて 行きつく果や 蕎麦の花

山裾の さびしき村や 蕎麦の花

白雲の 流るる先の 蕎麦畑

空青レ 山また青レ 蕎麦の白

風吹けば こぼるる白さ 蕎麦の花

屋根赤き 分枝ひとつ 蕎麦の花

野仙に ひとつ手向けん 蕎麦の花

その中から、まあまあ、と思えそうなのを二句選んで書き写し、妻を見たり、短冊は前に置いたまま、全然手をつけていない。

「つくらのかね」と聞くと、

「私はパス。食べてる方がいい」と応える。

「それじゃ、準備してくれた人たちに悪いじゃないか。その

短冊・寄こしな。少し、分けてやる」と言って、適当にみつ
くろつてやった。

そんな時、バツタリ村・村長の木藤吉徳一郎さんが挨拶に
来られた。

山形村は今日が祭りで、これから帰る、と云う。

「祭りにぶつかりましてね。でも、懐かしい顔ぶれが集まっ
ているんじゃないかと思ひまして、飛び入りで参加しました」

「木藤吉さんもお元気そうで、あれからずいぶんになります
が、全然変わっていませんね」

「お陰さまで。でも、もう十分な年寄りです」

ここで、「あれから」というのは、木藤吉さんには、たまた
づけマスコミから取材を受けた時があった。

十年ほど前、東大生が木藤吉さんを訪ねてきて、しばらく
生活を一緒にしたことがある。

テレビでの彼は、真面目そうな学生に見えたが、どこか、
都会人になりがちな、ひ弱さも感じられた。

彼は東大に合格して受験戦争から解放された、と思った時、
自分は一体何者であるか、何のために生きているのか、何も
知らない自分に気づいた。その思いは次第に膨らみ、やがて
すべてが無意味に思えて、学校にも通えなくなった。

そして、あちこち放浪した末、木藤吉さんのバツタリ村に
やって来た。

自分が何者であるか、その解答が、ここで見つかったわけ
ではなかったように思う。けれど、陽が上ると起き、一日、
自然の中で汗を流して働き、夜は囲炉裏を囲み、これまでの
自分を語ったりする。だが、木藤吉さんは意見めいたことは
何も言わない。夢を籠を編みながら、しかし、彼の言葉一つ
ひとつを全人格で受け止めている。時折、バスに乗って小学
生たちが、自然体験や野外活動でバツタリ村にやって来る。
彼は木藤吉さんについて助手のような仕事を手伝う。

そうやって数ヶ月、生活をするうち、彼はだんだん元気に
なっていく。木藤吉さんたちの見守りを感じて、単純だけ
れと豊かな大自然の営みの中で、自分の内に、がんばってみ
たいという力が甦ってくるようになる。

スし振り、木藤吉さんに会ってそんなことを思い出して
たら、

「そろそろ、お暇ですよ」と、奥さんが木藤吉さんを迎える
来た。だが、奥さんも結構、話好きである。一言、三言、言
葉を交わすうち、いつの間にか、座り込んで話にかわるよう
になっちゃった。とうとう、こちらが心配になっちゃって、

「山形村のお祭り、木藤吉さんがいなければ、始められないんじゃないですか」と、促した。

「食べるもの、飲むもの、まだあります。このまま残していても仕末が大変です。よかつたら、お持ち帰りください」

高家さんの奥さんが皆に声を掛けていた。

そうこうするうち、四時になったか、皆は、森のそば屋に移動した。蕎麦を振舞われながら宴をつづけようということである。

もう十分、食べて飲んだと思っていたが、蕎麦もまた良く、箸を二つ、お代りしてしまった。

その内、すっかり忘れていた、俳句とデジカメ写真コンテストの表彰式になった。

「それでは、発表します」。高家さんのご主人が声を強めた。「最優秀賞は、一点です」。一瞬、静かになった。

高家さんのご主人は、おもむろに名前を呼びあげた。それは、妻だった。拍手と歓声があがった。そして私の代表作は、次の、次だった。

妻は、額に入れた、森の中の水車小屋の絵をもらった。

「奥さんも、ほかほか、ですわね」。酌にきた一人が言った。

「ええ、まあ……、仕方がないから、そう忝えておいた。

それからまた、宴がつづいた。

「それでは、今日のゲストで、東京から来られたカメラマンさんに、一言、お話を伺います」と、高家さんのご主人が言った。

「私の仕事は写真ですが、カメラだけで生活するのは、なかなか苦しいです」

高家さんは、デジカメ写真コンテストの作品について、プロの眼から見た感想を話してもらいたかったようだった。が、彼はまったく別なことを話した。

酔いで意識は多少朦朧としていたから、どこまで正確に話を聞きとったか、まったく自信はないのだが、彼は大体次のようなことを語った。

カメラマンがカメラだけで生活するのは苦しい。それで世の中に迎合して、可愛い動物とか、裸の女の子を撮るようになる。けれど自分は、ドキュメントで、人間の生命の輝き、真実の重みみたいなものを撮りたいと思っている。

カメラマン自身、その思いをどれほど深く受け止めて言っているのか判らなかつたが、その思いは、良く判った。

力がありながらチャンスに恵まれず、結局、食べるために夢を捨てた人を、私は何人も知っている。

また、生活のために適当な所で折り合いをつけ、自分の力をそれ以上伸ばせやしません終ってしまった人も知っている。

そして、未だ世間に認められないながら、自分の可能性も判らないまま、模索しつづけている人も知っている。

このカメラマンが本当のところ、どうなのか、私は知らないが、夢と現実の間で苦勞していることだけは確かだろうだ。

仕事をとおし、人間の真実を見つめたいという思い。無力ながら、なんだか彼にエールを送りたい気分になった。

江刈川は、山に囲まれた村であるせいか、夜にぼるのか早いように感じられた。

そのうち、外で涼んでいた妻が入ってきて、中村さんに、

「私らは、佐々木さんの車で先に帰ります。主人のことは、

よろしくたのみます」と言っている声が聞こえてきた。なかなか腰を上げない私に業を煮やしたらしい。

それから先のことを、私はあまりよく覚えていない。皆さんのお世話を受けながら、我身、とにかく無事に家まで帰りついたらしい。

こうやって、八月二十六日の、森のそば屋主催、「そばの花見会」は終わったのだった。